（郵便物認可）　（本號六面）　明治二十三年四月十五日　（定價金二錢）

時事新報

時事新報は一年三百六十五日一日も休刊無し

第二千六百二十五號
明治廿三年四月十五日　火曜日
舊曆庚寅二月廿六日　（丙寅）

（西曆一千八百九十年）

時事新報定價
時事新報へ一年三百六十五日一日モ休刊セズ其代價遞送料廣告料ハ左ノ如シ
一枚二錢○一箇年前金五千錢○三箇月前金一圓五十錢○六箇月前金三圓○一箇年前金六圓
○時事新報社ヨリ直接ニ郵便ニテ送スルモノニ限リ右定價ノ外ニ一箇月十五錢ノ運送料ヲ申受ク

時事新報廣告料前金

一行五號活字廿四字詰	一日限	二日以上六日迄	七日以上
一行ニ付	十二錢	十一錢	十錢五厘

月曜日并に大祭祝日の翌日等他新聞紙の休刊日に限り時事新報配達の求めに應ず此場合には新報代價一箇月前金八錢にして地方に郵送する分は此外に貼用する郵便印紙の代價を申受く可し

時事新報

大演習の概評

名古屋の客舎に於て　石河幹明稿

今回の大演習は大作戰の計畫を實地に試みたるものにして其結果は我國軍事上の未來に少なからざる經驗を與へたる事ならん我輩は幸に陪覽の榮を得て前後數日間演習地に奔走し其實況を目擊したれども亦面なから平生軍事の知識に乏しきと又一つには戰地從僂の際、詳細の實況を探究するの暇なきとを以て過日來本紙上に登載したる記事の如きも時としては多少事實を誤り又時としては報道單略に過ぎて讀者に十分の滿足を與ふるあと能はざりしは甚だ遺憾に堪へざる所なり然りと雖も此事たる各新聞社ともに免るゝ能はざるの憂にして獨り我社のみにもあらざれば總て此邊の事情は暫く讀者の宥恕を乞ふ事として扨其結果に就き聊か概評を試みんとするに部見を以てすれば今回の演習は先づ以て非常の大出來なりと云はざるを得ず抑も我大作戰の計畫は夙に參謀本部の料理する所となりて其計畫は既に熟したるものなる可しと雖も兎に角に今回の如く一時に三萬以上の大兵を動かしたるは前古未曾有の事にして經驗中の經驗とも云ふ可きものなれば其結果の如何は世人の頗る氣遣ひたる處なるに實際には何等の不都合もなく果して計畫通りに行はれたるは先づ我輩の意想外に出でたる所なり單略に至りては東西兩軍の施爲運動其宜しきを失はず能く軍紀を守りて其任務を盡したるは今更云ふ迄もなき處なれども暫く其目擊したる處により一家の私言を以て之を評せんに去月三十一日午田附近に於ける西軍增加隊と東軍枝隊との攻防は雙方ともに別に可否する所ある可らずと雖も西軍の戰鬪艦隊が其搭載したる陸兵を揚陸するゝ時機の延滯を致し爲めに陸戰の計畫上に變化を及ぼさしめたるが如きは我輩の遺憾とする所なり抑も今度の演習に就て海軍部の目的とする所は專ら陸兵揚陸の一事に在りと云ふも可なる樣の次第なれば其平常の技術を顯はす可き機會は實に去る三十日戰鬪艦隊が伊勢海の守を破り知多灣へ侵入したる其瞬間に在りし事あらんに事の實際に機宜を失したるの觀あるは果して如何なる原因に出でたるや此一事は今後當局者の須らく研究を要する主點なる可し四月一日東海道今村附近に於ける東西兩軍の陸戰は雙方ともに好地形を占め且つ步砲兩兵の展開も亦その宜きを得たるが如し但し此戰ゝ於ては西軍專ら其主力を左翼に蠶し東軍も亦その主力を右翼に集め以て之に當らんとするの覺悟ありたるが如くなれども其用意未だ整はずして西軍の爲めに一着を先んぜられたるは東軍の爲めに不利なるのみならず且つ又當時新街道に向ひたる東軍の枝隊が本道の砲聲を聞きながら之に赴援せざりしも亦東軍の一不利に數へざるを得ず而して此戰に西軍より退却を始めたるは演習の情況ゝ依り統監よりの命令にして當日の戰狀には關係なきものなりと云へり本月二日平針村の大戰は兩軍ともゝ全力を盡したる最後の戰にして最も其技倆を見る可きものなりとす蓋し此日の戰には西軍は一旅團の兵を以て平針街道の要所なる八事山を守り其本軍は熱田附近の地に屯し笠寺山邊に二聯隊の豫備隊を備へ東軍は一師團の兵を舉て平針街道に向ひ更に一旅團の枝隊を東海道に向はしめたるなり左れば若しも東軍が最初に全力を以て八事山を攻撃するに於ては或は其目的を達せしならん如何とあれば八事山の西軍は僅に一旅團にして大砲は山砲十一門に過ぎざるのみならず左翼の如きは其備最も薄弱なりしを以てあり然るに東軍の攻撃未だ盛ならざる中に西軍は早く既に東軍が主力を盡して平針街道に向ひたるを探知し急ゝ二聯隊の豫備隊を赴援せしめ且つ其山砲に換ふるに野戰砲を以てしたるが故に其守既に堅くして東軍の攻撃は功を奏せずして判せられたるものならん要するに雙方ともに其施爲目的に於ては敢て優劣あるし雖も强て相違の點を求むれば西軍の運動は常に機を制するに觀く東軍は十分の決心ありと雖も之を斷行するに果敢ならざりしものゝ如し然りと雖も其大體ゝ就ては兩軍ともゝ能く其施爲を誤らずして軍事の進歩の見る可きもの少からざりしと云ふ例へば砲兵縱列の如き事畑上にては今度の演習地の如き丘陵山岳の多き地には使用す可らざるものと定まり西洋諸國の兵法家などは固く其說を信ずるに拘らず今回の實際に於ては砲門の展開運轉その宜きを得て毫も差支を見ざりしのみならず二日の戰の如きは兩軍八十餘門の大砲を丘陵山間狹隘の地に排列して一門も闕却せしめざりし如きは實に手際のものにして陪覽の外國人なども驚嘆措かざりしと云ふ顧ふに今回の演習に就き得たる所の結果は是等の數事に止まらず進て彼の鐵道運輸の事等の如き今回の經驗に如何なる結果を得たるや我輩の最も聞かんと欲する所なれども客舍匆々事實を取調ふるの暇あげれば他日歸京の上詳細の報告を得て更に評論する所ある可し

官報

○內務省訓令第十八號

市町村吏ヲシテ國庫支辨ノ用務ニ付旅行セシムルトキハ明治十九年本省令第十一號警察官吏其他內國旅費概則甲號表面ノ旅費ヲ同年閣令第十四號內國旅費規則ニ據リ支給スヘシ

明治廿三年四月十四日　內務大臣伯爵山縣有朋

○登記件數及登記料手數料　昨二十二年七月より十二月に至る六箇月間地所建物船舶の賣買讓與質入書入等に附き登記を爲したる件數及金額即ち登記料、手數料を調査するに件數百十六萬六千六百六十二件、金額五十三萬六圓五錢內登記料金五十一萬九千四百三十二圓九十錢、手數料金一萬五百七十三圓十五錢なり右件數、金額を以て各控訴院管轄に區別すれは東京控訴院管內件數三十三萬四千九百十件、金額十九萬八百三十九圓三十五錢、大坂控訴院管內件數三十二萬百五十七件、金額十四萬七千二十三圓三十錢、名古屋控訴院管內件數八萬九千四百九十二件、金額三萬七千三百八十五圓八十錢、廣島控訴院管內件數十萬六千九百件、金額三萬六千九百二十一圓六十錢、長崎控訴院管內件數十七萬六千八百三十二件、金額五萬三千八百二十三圓二錢五厘、宮城控訴院管內件數十一萬六千二十八件、金額五萬百六十五圓九十七錢五厘、函館控訴院管內件數二萬二千三百四十三件、金額一萬三千八百四十七圓にして其詳細は左表の如し但し登記料手數料を要せざる事件（登記法第三十一條）の件數も亦本表中に合載す（表は略す）

雜報

○朝鮮近信（京城四月四日發）

近藤公使の解判　前便に報道せし如く朝鮮政府が咸鏡道監司趙秉式をして二十四胴を續任せしめたるは不都合に付我近藤公使は屢々外衙門に赴き解判すれども外務督辨は明確なる答をなさゞるを以て遂に內務督辨に迫まり現今領議政へ談判を請求中なりと云ふ

大院君の近狀　大院君は數十日前より病床に臥して多くの來客に面會を謝絕し居たりしが五六日前より病床を出で衣冠を正着せる由にて此程君に面會せし人の話に從へば君は國家の大計に關して意見を有すれども事を共にすべき人才の無きを歎息せりと云ふ

外人放逐事件に就て　天津駐在使金明奎氏が歸國したる事は前便に報道せしが彼の外人放逐事件に關する用向を帶びて天津に赴きし特命使節閔官邊錫運氏も歸國したるよし抑も邊氏歸國の理由は未だ詳開せざれども氏は義に天津に着するや否や李中堂に面會して自己の意見を具陳せしと雖ども中堂は邊氏の言に贊成の意を表せず左樣なる事を申すは國家の安危を思はざるものなりと云ひ始てゝ直に北京に上りたる趣なるが其節邊氏は袁世凱氏の指揮ゝ從ひて天津に來りたりと述べし由にて袁氏は外衙門に迫り解判中なれば今日邊氏が歸國せば又々爭論も始まるあらん

當五錢流通區域の擴張　屢々報道する如く鑄錢事業は次第に盛なれども該錢通用區域は至て狹く貿易市場ゝは京仁間に流通するのみにて釜山元山兩港には通用せず而して內地にては京幾道の外は通用する所もあり通用せざる所もあり殊に全羅、慶尙、咸錢道等の如きは政府の通用貨も通用せざる有樣なりしが一昨年來鑄錢の事業は頗る盛にして今日迄に鑄錢したる高は大凡五百萬貫文なるべしと云へり然かのみならず昨今盛花亭典圓局にては一層鑄錢を盛ゝし殖數凡そ三十ゝ及び一日二萬貫文を鑄るべき譽なるに今日錢の拂底するは通用區域を擴張せし爲なるべしと云へり

○京都電報（四月十二日發）

兩陛下　聖上、皇后兩陛下は兼て伺せ出されたる如く本日午後一時御出門遊ばされ御同列にて洛東聖護院村なる山階宮邸へ臨御あらせられしが御餘興として數番の能樂、仕舞等の催しあり府廳、裁判所等の高等官幸啓の御日取　天皇陛下大行幸啓の御日取も皇后陛下大出されねど既れも多分及びぬ

有栖川一品親王殿下

しと云ふ

三條忠成公の三十年祭　三條忠成公の三十年祭を司其他有志の者三條內備等を相談したるよ行幸の供奉　昨日西鄕吳、佐世保兩軍港へ嵐山の櫻　大君の御幸も過日來の風雨にて御見合せゝなりしも御見合せゝなりしと云ふ

○富山の靈闘　兼て陸兵第七聯隊第一大隊の日當地へ着し當日及其十三日は高岡市に一泊し由なり○富山市區區に區長一名代理者一市會に於て區長及び代と○北陸公論の公判論に係る誹謗事件の公裁判所ゝ於て開廷す

尋常中學校　去る一日教員一同の總辭職と此程漸く校長を始め以て愈々昨十四日ゝ

彼の板垣伯の組織　山縣下ゝ續々現れ大同るが現に高岡市の射の總會を開き同部存僞果して如何にや

旅の道草（前號ゝ續く）

笑處は名ゝ貧ゝ興山の樣かなる冒和となり て心も穩りに浮立つ山陽新報社ゝ立寄りだ出勤せずと聞き止じ直ゝ使を小出氏の間もなく來る坐間小し殘惜しく思ひしかも余は歸途の再會を期に余等は岡山の市街を迄快晴の天氣も知らし吹く風は肌を劈く凍死せんとするの想一驛に達し午餐を喫處ゝりは次第に山路箇所多く車の通み方しめたり殊に行く道樣なる景色にて少し云ふの外なし是れども外に視るべ